

## P-9

### 属格主語が可能な言語の性質: 格パターンと述語同一性\*

Properties of languages that allow genitive subjects: Case patterns and predicate identity

牧秀樹・ゼステルパ

Hideki Maki and Mjesd'alpa

岐阜大学・京都大学大学院

Gifu University and Graduate School of Kyoto University

人間言語において、属格主語を許容する言語は、相当数ある。また、人間言語の格配列パターンは、能格型と対格型に大きく分かれる。これらの事実を踏まえ、本研究では、次の研究課題に取り組む。「人間言語において、属格主語を許容し、その格パターン(能格性・対格)と属格・X 格主語(X は、主語となる項に付く格)が共起する述語の同一性(述語同一・述語非同一)に関して、4種の言語(能格・対格×述語同一・非同一)が、存在するだろうか？」調査の結果、この研究課題への回答は、肯定的であることがわかった。このことは、属格主語は、人間言語の根本的な性質の一つであることを示唆している。また、この結果を土台として、古代日本語と現代日本語の例を調査すると、古語は、トルコ語のように、対格言語述語非同一型、現代日本語は、モンゴル語のように、対格言語述語同一型にあてはまることがわかった。このことから、日本語が、平安期以降、対格言語内で変化したことがわかる。また、万葉集第3期(平城京遷都(710年)–天平5年(733年))においても、平安期と同様の例があることから、奈良時代の日本語は、トルコ語のような対格言語であったことがわかる。

#### 1. はじめに

人間言語において、属格主語を許容する言語は、相当数ある。例えば、モンゴル語である((1)と(2)) (Maki et al. (2016))。 (2)における属格主語は、(3)に示すように、主格主語に置き換えることもできる。属格主語認可条件の考察は、以下の研究者の成果を参照せよ(Harada (1971), Harada (2002), Hiraiwa (2001), Kobayashi (2003), Maki, Bao and Hasebe (2015), Maki et al. (2016), Miyagawa (1993, 2011, 2012, 2013), Ochi (2001, 2009), Watanabe (1996))。

以下、 $\emptyset$ =音声がない格、Abs=絶対格、Acc=対格、Adn=連体形、Atp=抗受動態、Con=終止形、Cop=繫辞、Det=冠詞、Erg=能格、Gen=属格、Nml = 名詞化要素、Nom=主格、Past=過去、Pl=複数、Pres=現在、Prf=完了、Top=話題を示す。

- (1) Ulayan- $\emptyset$  tere nom-i biči-jai. (モンゴル語)  
Ulagan-Nom that book-Acc write-Past.Con  
‘ウラーンがその本を書いた。’
- (2) [Ulayan- $\square$  biči-gsen] nom (モンゴル語)  
[Ulagan-Gen write-Past.Adn book  
‘ウラーンの書いた本’
- (3) [Ulayan- $\emptyset$  biči-gsen] nom (モンゴル語)  
[Ulagan-Nom write-Past.Adn book  
‘ウラーンが書いた本’

これらのデータは、モンゴル語において、属格主語が許容され、同時に、主格主語も属格主語も、連体形である述語とともに共起できることを示している。モンゴル語は、対格言語であると考えられている。人間言語の格配列パターンは、能格型と対格型に大きく分かれる。格助詞を持つ言語に関して、最も簡略化して言えば、能格言語は、他動詞の主語に格助詞が出現し、対格言語は、他動詞の目的語に格助詞が出現する。また、能格言語においては、他動詞目的語に格助詞が現れず、対格言語においては、他動詞主語に格助詞が現れない。モンゴル語においては、(1)が示すように、他動詞主語に格助詞が現れず、他動詞目的語に格助詞が現れている。両格型をより詳しく言えば、能格型は、自動詞の主語と他動詞の目的語が同列に扱われ、他動詞の主語だけが別の扱いを受け、対格型は、自動詞の主語と他動詞の主語が同じように扱われ、他動詞の目的語だけが違う扱いを受ける。これまでの調査で、属格主語は、対格言語だけでなく、ウルドゥ語のような能格言語においても許容されることがわかっている(Maki and Bhutto (2013))。これらの事実を踏まえ、本研究では、次の研究課題に取り組む。以下、能格言語は、厳密にそう言えない場合を考慮し、便宜上、能格性言語と呼ぶ。

#### (4) 研究課題

人間言語において、属格主語を許容し、その格パターン(能格性・対格)と属格・X格主語(Xは、主語となる項に付く格)が共起する述語の同一性(述語同一・述語非同一)に関して、(5)に示す4種の言語が、存在するだろうか？

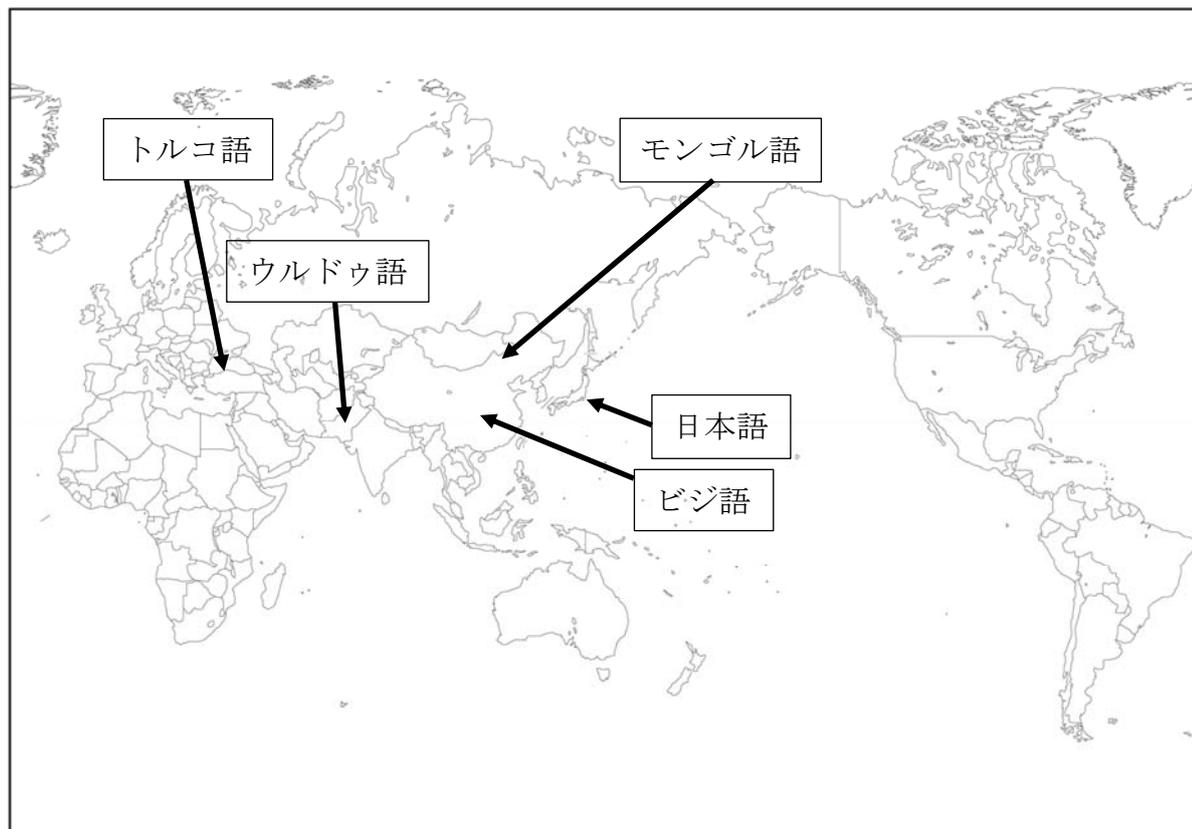
#### (5) 属格主語を許容する人間言語における格パターンと述語同一性

	述語非同一	述語同一
能格性言語	1	4
対格言語	2	3

既に、(1)–(3)の例により、モンゴル語は、(5)-3(対格言語述語同一)型に当てはまることがわかっている。本調査の意義は、属格主語が、人間言語において、どの格パターンでも出現しうるかを明らかにし、その結果に基づいて、人間言語の性質の一部を明らかにすることができることである。

本稿で扱う言語は、モンゴル語、ウルドゥ語、トルコ語、ビジ語、日本語である。それらが話されている地域は、以下の地図に示される。ただし、各言語が話されている場所は、煩雑さを避けるため、完全には網羅されていない。

(6) 地図: 本稿で扱う言語とそれが話される場所



無料白地図: ちびむすドリル小学生 (<http://happylic.net/sy-sekaitizu-s3.html>)

2. データ: (5)の4つの型に相当する人間言語が存在するか、一つずつ、確認する。

2.1 (5)-1(能格性言語述語非同一)

ウルドゥ語が、この型に属する。ウルドゥ語は、インド・ヨーロッパ語族インド・イラン語派インド語派に属する言語の一つで、パキスタンの国語である。能格性言語で、基本語順は、SOV である。以下の例は、Maki and Bhutto (2013)からである。

(7) John-ne kal kitab khareedi. (ウルドゥ語)

John-Erg yesterday book bought

‘ジョンが昨日本を買った。’

(8) [kal John-ki/\*-ne khareedi-hui] kitab (ウルドゥ語)

[yesterday John-Gen/\*-Erg bought-Adn] book

‘昨日ジョンの買った本’

2.2 (5)-2(対格言語述語非同一)

Kornfilt (2003)が示しているように、トルコ語が、この型に属する。トルコ語は、テュルク諸語の南西語群(オグズ語群)に属する言語である。対格言語で、基本語順は、SOV である。以下の例は、İsa Kerem Bayırlı 氏(私信)による。

- (9) Biz- $\emptyset$  yemeğ-i pişir-di-k. (トルコ語)  
 we-Nom food-Acc cook-Past-1.Pl  
 ‘私たちは、その食べ物を料理した。’
- (10) [Biz- $\text{im}^*$ - $\emptyset$  pişir- $\text{diğ}$ -imiz] yemek (トルコ語)  
 [we-Gen/\*-Nom cook-Past.Adn-1.Pl.] food  
 ‘私たちの料理した食べ物’

### 2.3 (5)-4(能格性言語述語同一)

(5)-3(対格言語述語同一)型は、すでにモンゴル語で見たので((2)と(3))、

- (2) [Ulayan- $\text{u}$  biči-gsen] nom (モンゴル語)  
 [Ulagan-Gen write-Past.Adn book  
 ‘ウラーンの書いた本’
- (3) [Ulayan- $\emptyset$  biči-gsen] nom (モンゴル語)  
 [Ulagan-Nom write-Past.Adn book  
 ‘ウラーンが書いた本’

(5)-4 型の言語が存在するかどうか調査する。ビジ語がこの型に属する。ビジ語は、チベット・ビルマ語派の言語で、中国の湖南省、湖北省、重慶市などで話されている。能格性言語で、基本語順は、SOV である。牧ほか (2023)は、ビジ語は、属格主語を許容しないと報告している。(11)で示されるように、ビジ語の所有者には、属格マーカ-の-ge が付加される。

- (11) Kyâši-ge c'ekpu  
 ジュシ-Gen book  
 ‘ジュシの本’

牧ほか (2023)は、(12)と(13)を提示し、ビジ語においては、属格主語が認可されないと述べている。

- (12) \* [B'ukn'i ñ'é/ña-ge sewg-ś] xoju-ni kumduş ŝgyatpa xoju zin.  
 [yesterday I.Gen/I-Gen pleased-Nml] time-Top a.m. 8th time be  
 ‘昨日私の喜んだ時間は、午前 8 時だ。’
- (13) \* [B'ukn'i Kyâši-ge žû-p'u-dři-ś] c'ekpu-ni aldi c'ekpu ras.  
 [yesterday Kyâši-Gen Atp-buy-Prf-Nml] book-Top this book be  
 ‘昨日ジュシの買った本は、この本だ。’

しかしながら、本調査において、以下に示すように、述語が状態を示す場合には、安定して、属格主語が可能であることが明らかになった。

- (14) Jañ-jû-mé gi sñik'yi- $\emptyset$  fêlbaras. (ビジ語)  
 elephant-Pl-Top Det trunk-Abs long Cop  
 ‘象は、鼻が長い。’
- (15) [sñik'yi- $\emptyset$ -ge] fêlba-na] že (ビジ語)

[trunk-Abs/-Gen long-Nml] animal  
 ‘鼻が/の長い動物’

### 3. 議論

上記のデータより、研究課題 (4)

#### (4) 研究課題

人間言語において、属格主語を許容し、その格パターン(能格性・対格)と属格・X格主語(Xは、主語となる項に付く格)が共起する述語の同一性(述語同一・述語非同一)に関して、(5)に示す4種の言語が、存在するだろうか？

#### (5) 属格主語を許容する人間言語における格パターンと述語同一性

	述語非同一	述語同一
能格性言語	1	4
対格言語	2	3

に対する回答は、肯定的であることがわかった。このことは、属格主語は、人間言語の根本的な性質の一つであることを示唆している。また、この結果を土台として、古代日本語と現代日本語の例を調査すると、(16)–(19)に示すように、古語は、トルコ語のように、(5)-2(対格言語述語非同一)型、現代日本語は、モンゴル語のように、(5)-3(対格言語述語同一)型にあてはまる。古語では、主格(ø)・属格(の)主語が共起する述語(の活用)が異なる(「けり」・「ける」)が、日本語では、同じである(「静かな」)。

(16) さること-øありけり。 (古代日本語)  
 (『うつほ物語』)

(17) [かかることども]の/\*-øあり[ける]こと (古代日本語)  
 (『うつほ物語』)

(18) 今日は、海が静かだ。 (現代日本語)

(19) [海が]の静か[な]日 (現代日本語)

この結果は、(20)にまとめられる。

#### (20) 属格主語を許容する人間言語における格パターンと述語同一性

	述語非同一	述語同一
能格性言語	ウルドゥ語	ビジ語
対格言語	トルコ語・古代日本語	モンゴル語・現代日本語

このことから、日本語が、平安期以降、対格言語内で変化したことがわかる。また、万葉集第3期(平城京遷都(710年)–天平5年(733年))においても、(16)と(17)と同様の例があることから((21)と(22))、奈良時代の日本語は、トルコ語のような対格言語であったことがわかる。

(21) ぬばたまの黒髪変はり白けても痛き恋にはあふ時-øありけり

(笠朝臣麻呂(かさのあそみまろ))

- (22) 山守<sup>の</sup>あり<sup>ける</sup>知らに その山に 標結ひ立てて 結ひの恥しつ  
(大伴坂上郎女(おほどものさかのうへのいらつめ))

これは、柳田仮説 (2007, p. 148) 「上代語(万葉集と平安初期の訓点資料を主な言語データとした)が形態的には活格、統語的には、能格言語の特徴を有し、平安初期に能格から対格システムへ移行した」に一定の示唆を与える。また、現代日本語の属格主語の出現に対して、他動性制限 (Harada (1971)、Miyagawa (1993)、Watanabe (1996)) があることから ((23)と(24))、それが無いモンゴル語とは ((25)と(26))、一線を画し、むしろ、現代日本語の属格主語出現状況は、ビジ語の状況と似ている。

- (23) [昨日イチロー<sup>が</sup>ショウヘイをほめた] 理由 (現代日本語)

- (24) \* [昨日イチロー<sup>の</sup>ショウヘイをほめた] 理由 (現代日本語)

- (25) [öcügedür Bayatur-<sup>∅</sup> Ulayan-i mayta-y<sup>san</sup>] siltayan (モンゴル語)  
[yeterday Bagatur-Nom Ulagan-Acc praise-Past.Adn] reason  
‘昨日バートルがウランをほめた理由’

- (26) [öcügedür Bayatur-<sup>un</sup> Ulayan-i mayta-y<sup>san</sup>] siltayan (モンゴル語)  
[yeterday Bagatur-Gen Ulagan-Acc praise-Past.Adn] reason  
‘昨日バートルのウランをほめた理由’

このことは、(5)-3 型内部に、何らかの差異決定要素があることを示唆している。その要素自体の解明は、今後の調査を待つ必要がある。

## 参照文献

- Harada, Naomi (2002) *Licensing PF-Visible Formal Features: A Linear Algorithm and Case-Related Phenomena in PF*, Doctoral dissertation, University of California, Irvine.
- Harada, S.-I. (1971) “Ga-No Conversion and Idiolectal Variations in Japanese,” *Gengo Kenkyu* 60, 25–38.
- Hiraiwa, Ken (2001) “On Nominative-Genitive Conversion,” *MIT Working Papers in Linguistics 39: A Few from Building E39*, ed. by Elena Guerzoni and Ora Matushansky, 66–125, Cambridge, MA.
- Kobayashi, Yukino (2013) *Japanese Case Alternations within Phase Theory*, Doctoral dissertation, Sophia University.
- Kornfilt, Jaklin (2003) “Subject Case in Turkish Nominalized Clauses,” Uwe Junghanns and Uwe Szucsich (eds.) *Syntactic Structures and Morphological Information*, 129–215, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Maki, Hideki, Lina Bao, Wurigumula Bao and Megumi Hasebe (2016) “Scrambling and Genitive Subjects in Mongolian,” *English Linguistics* 33, 1–35.
- Maki, Hideki, Lina Bao and Megumi Hasebe (2015) *Essays on Mongolian Syntax*, Kaitakusha, Tokyo.
- Maki, Hideki and Amanullah Bhutto (2013) “Genitive Subject Licensing in Modern Urdu,” *English Linguistics* 30, 191–203.

- 牧秀樹・ゼステルパ・牧レオナ (2023)「中国西南官話湘西小片における属格主語」, 日本言語学会 166 回大会予稿集, 142–148.
- Miyagawa, Shigeru (1993) “Case-Checking and Minimal Link Condition,” *MIT Working Papers in Linguistics 19: Papers on Case and Agreement II*, ed. by Colin Phillips, 213–254, Cambridge, MA.
- Miyagawa, Shigeru (2011) “Genitive Subjects in Altaic and Specification of Phase,” *Lingua* 121, 1265–1282.
- Miyagawa, Shigeru (2012) *Case, Argument Structure, and Word Order*, Routledge, New York.
- Miyagawa, Shigeru (2013) “Strong Uniformity and *Ga/No* Conversion,” *English Linguistics* 30, 1–24.
- Ochi, Masao (2001) “Move F and *Ga/No* Conversion in Japanese,” *Journal of East Asian Linguistics* 10, 247–286.
- Ochi, Masao (2009) “Overt Object Shift in Japanese,” *Syntax* 12, 324–362.
- Watanabe, Akira (1996) “Nominative-Genitive Conversion and Agreement in Japanese: A Cross-linguistic Perspective,” *Journal of East Asian Linguistics* 5, 373–410.
- 柳田優子 (2007)「上代語の能格性について」, 長谷川信子編『日本語の主文現象』, 147–188, ひつじ書房, 東京.

\*本稿の執筆にあたって示唆をくださった方々・言語データを提供してくださった方々に感謝する。包麗娜氏、包婷婷氏、ウリグムラ氏、İsa Kerem Bayırlı 氏。本稿のすべての不備は執筆者自身のものである。

連絡先メール住所: Hideki Maki <maki.hideki.d5@f.gifu-u.ac.jp>